（別紙様式５）

山梨県若者海外留学体験人材育成事業（大学生等コース）
留学結果報告書

令和　６年　７月　20 日

山梨県知事　殿

本人氏名　　水野　ひな

次のとおり留学の成果を報告します。

留学先国名	イギリス
学校等名	オックスフォード・ブルックス大学
留学期間	令和　5 年　9 月　　23 日 ～ 令和　6 年　7 月　　17 日

9 か月間にわたるイギリス生活を、私は「人と繋がる」ことをテーマに過ごしてきました。なぜなら、様々な文化背景を持った人々との出会いやコミュニケーションが、自身に前向きな変化をもたらしてくれるのではないかと考えていたからです。そんな期待とともに始まった留学生活は、様々な角度から自分を見つめなおす素敵な経験になりました。特に、自身の「英語力」と「異文化理解力(自分と相手の価値観やルールの差を相対化し、考えや行動を受け入れる力)」に関して、大きな成長を実感しています。

１．　英語力について

まず初めに、「英語力」の定義について考えさせられることが何度もありました。私は大学で教育学の英語を専攻しており、子どもが英語を使って何ができるようになるか、を考えて授業を作ることが大切だと学びました。文法や単語を間違えずに適切に使えること、正しい発音ができること、流暢に話せること… 等、様々な意見があると思います。以前はその中でどれを優先すべきなのか悩んでいましたが、留学を通して「理解できること、伝わること」が大切なのではないかと感じるようになりました。オックスフォード市には様々な国からの留学生が集まりますが、自国のアクセントを気にせずに、自信をもって話している方々ばかりでした。正直、アメリカとブリティッシュアクセントくらいしか聞いたことのなかった私は、イギリスで生活し始めたばかりの頃、発言を全く理解できず戸惑いました。しかし、ネイティブスピーカーたちは他国のアクセントが強かったとしても、それを理解して会話しており、それぞれの国のアクセントがあって当たり前だということに気づきました。また、会話中私が文法的ミスを繰り返したり単語でしか返せなかったりしても、彼らは決して馬鹿にすることなく話を聞いてくれま

した。日本にはどこか、きちんとした文法で英語を話さないと恥ずかしい、ネイティブスピーカーのようにうまく話せないと、というような風潮があるような気がしますが、赤ん坊が第一言語を習得するように、まずは正しく話せなくとも、聞こえる、伝わるコミュニケーションが英語の学習をさらに楽しくするのだと思います。

留学の結果として、このような英語で理解できる、伝える力とそれに付随するマインドを、人との繋がりを広げていく中で鍛えることができました。大学の授業では、自分の意見をその場で説明する機会や、他の生徒からの質問に答えなければならない場面がたくさんありました。留学前は英語を使うことへの緊張や恐怖からか、話す前に頭が真っ白になってしまうような感覚になることが多かったのですが、会話をひたすらくりかえすことで改善していきました。例えば、表現の仕方が分からないときや相手に伝わらなかったときに、別の英語表現に言い換えることを考えます。慣れていないと焦ってしまい、沈黙になってしまうことは多々あると思いますが、やはり意識的に繰り返すことで自分のマインドを落ち着いてコントロールすることができました。

また、授業では教師や他の生徒の意見を聞き取ることも欠かせませんでした。アクセントの強く速い英語聞きとることは本当に難しく、時間をかけて慣れていく必要がありました。すべてを正確に聞き取ることは難易度が高いため、私は状況や話の流れから相手の発言を推測することを意識していました。やみくもにすべて聞き取ろうとするのではなく、目的意識を持って聞くことがリスニング力上達のコツだということに気づきました。

このような自己反省を踏まえ、私が教師になったとき、子どもたちが怖がらずに積極的に英語を使うことのできる学習環境を整えていきたいです。まずは、子どもたちが話すことに慣れるために、授業中英語で何を言っても良い、細かいミスなどは気にしないような雰囲気づくりに注力していくことが大切だと考えます。間違いを怖がらずに挑戦するマインドは、コミュニケーションを成立させたり、様々な英語スキルを向上させたりする基盤となるからです。これは私が留学中に経験したような、「失敗から学ぶ」ということを体感的に習得する方法でもあります。小学校から中学校にかけて、そういった挑戦から学ぶ学習スタイルに慣れていくことで、子どもたちの英語力をマインドの面から徐々に鍛えていくことができます。

さらに、それぞれの授業やテストにおいて、評価規準を多く設定しすぎない方法もあると考えます。評価規準とは児童生徒のパフォーマンスを評価する項目のことで、例えば、スピーキングテストにおいては「発音」「流暢さ」「正確性」等が考えられます。以前は私自身、このような様々な角度から評価してアドバイスをすることが子どもの英語スキルの成長により効果があるのではないかと考えていました。しかし、評価規準が多ければ多いほど、同時に子どもにプレッシャーをかけてしまうことに気づきました。あれも、これも上手にやらなければ、という気持ちは、結果として子どもの言語表現の自

由さを奪ってしまっているような気がするのです。それよりは、「相手に〇〇を伝えられたら完璧！」くらいシンプルな方が、のびのびと英語を使う精神を養うことができると思います。英語教授法には本当に様々な種類や考え方があるので、自身の今の考えを含め、実践に持ち込むなどして、これから日々研究を続けていく必要があると考えます。

２．　異文化理解力について

異文化理解力は文字通り「異文化を受け入れ理解する力」のことを指しますが、実際に何ができれば異文化理解力が高いと言えるのかについてピンとくる人は少ないと思います。以前は自身もその一人であり、「相手を思いやるやさしい心」みたいなものが異文化理解であるというざっくりとした解釈しか持っていませんでした。しかし、留学前に大学で異文化理解の授業を受講し、異なる常識やカルチャーに対する心の働きとそこから生まれる行動や態度には項目ごとに個人差があること、またトレーニングによって意識的に向上させていくことができることを知りました。

そこで、9 か月間の留学体験を通して、自身の異文化対応力がどのように変化するのかに興味を持ち、調査をすることにしました。方法としては、松本（2012）に示されている表（4 ページ下部を参照）を使用し、知識面、態度面、スキル面の 3 つの観点から、各項目ごとに留学前後で自己評価を行いました。留学中は「人と繋がる」というテーマに沿いながら、様々な人との繋がりやコミュニケーションの機会を自ら掴み取るよう意識し、大学や大学外で様々な国や年代の人々と出会うことができました。

結果として、知識面 8/12 項目中、態度面 6/9 項目中、スキル面 5/8 項目中というように、各観点で自己評価を向上させることができました。この結果に貢献したものは、やはり現地の人々との関わり、コミュニケーションだったと思います。例えば、表の項目 13(態度面)「異なる言語や文化との共通点・相違点に注目し、それを自然に把握し受け入れることができる。」を読むと、ある一つの経験が思い浮かびます。それは、イギリス人のおばあさんとキリスト教について話した時です。イギリスでは教会が主催する無料のイベントが多く、日常的な話題から宗教的な話題まで、その場で出会った人と話せる機会があります。神様について質問され、返答が思いつかなかった私は、「私はキリシタンではないからよく分からない」と答えました。するとその方は、「あなたがキリスト教かどうかは関係ない。あなたがどう思うかを聞いている。」と言ったのです。そこで私は、キリスト教の人たちと自分の間に一線を引こうとしてるのは、まさに自分自身だと気付きました。相手や周りの人は、私のことをキリスト教か否かというカテゴリーでは見ていない、色々な人がいて当たり前だ、というスタンスでいるのだと感じました。これまで日本にいたときは、深く考えずに分からないで済ませられてきたことも、イギリスではそうではなかった。この違いが自身の内面をより成長させてくれたのだと思います。

このような経験と自己評価から、異文化理解力は自身の意識と経験の積み重ねによっ

て養うことができる能力だと考えました。そこで、私は子どもたちが様々な文化に触れたり、外国籍の人々と関わったりする機会をもっと増やしていく必要があると主張します。例えば、子どもたちを対象にした、在留外国人と地域の日本人の交流イベントの企画などを考えたいです。形式ばったものではなく、来れる人が来たいときに来てゆっくり会話を楽しめるような、アットホームな雰囲気のある空間があれば、楽しみながら国際交流ができると思います。大切なのは、そのようなイベントが多くの子どもたちにとって身近になり、外国籍を持つ人々と話すことが特別なことではなくなる感覚だと思います。また、異文化の人々とかかわる時間を経て、参加者は自分の気持ちに向き合うこともできます。自分は何ができて、何を思ったのか、自分で評価し言葉で理解することが異文化対応力の向上に繋がると考えます。

このように、留学を通して英語力と異文化理解力の向上に努め、自身の成長を深く洞察することができました。その結果、英語教育に対する自分自身の考えと、異文化理解に関する思いと挑戦してみたいことの方針が具体的になりました。留学中に人と繋がることで得たメリットや気づきを多くの人に広めていけるよう、将来は繋がりを作る側として、日本人と外国人のコミュニティの架け橋となるような役割を果たしたいです。そして、お互いにとって本当に居心地の良い場所である、理想の共生社会の実現に貢献したいです。最後に、この度奨学金受給の機会を提供してくださった貴団体には、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

Can-Do リスト

※松本佳穂子（2012)「異文化対応能力及びクリティカル・シンキング能力の指標構築の試み」
『異文化交流』12 号 203-222、より引用して作成しています。

《使い方》
留学前後に以下の表を使って自己評価を行い、その比較を行う。各観点において、留学前の平均を大幅に超えることを目指す。また、留学前に評価した項目のうち、点数が低かった項目については、各項目を達成するための取り組みについて、具体的にどのような行動や心がけをするかを考えていく。
※ 留学前○　留学後○

【知識面＝言語と文化】

		1そうではない	2あまりそうではない	3おおよそそうである	4そうである
1	学習している外国語の基本的なルール（発音、文法、語法）や表現の特徴などを知っている。			○○	

2	その外国語についての歴史的、社会的、文化的な背景知識を持ち、様々な場面や状況に応じた使い分けが必要なことを知っている。		○	○	
3	その外国語を習得する方法やストラテジー（方略）についての知識があり、ストラテジーの効果は、その言語に対してポジティブな見方ができるかに左右される（ことを知っている）			○	○
4	言語は文化やアイデンィティーと深く関係し、コミュニケーション能力は複合的なものなので、言語能力だけでは十分ではないことを知っている。		○		○
5	世界には、様々な言語が存在し、さらに、多言語・多文化が接触するような状況が、様々な国や地域に存在することを知っている。		○	○	
6	各言語は固有の構造や体系を持ち、言語間で類似点や相違点があり、直訳をしても完全には同じ意味にならないことを知っている。			○	○
7	それぞれの文化が複雑な価値観や規範を持ち、それが人々の世界観やものの考え方に影響し反映されていることを知っている。		○		○
8	文化には、地域、世代などの様々なグループによる下位文化があり、一人の人が様々な下位文化に属することを知っている。			○○	
9	異文化間コミュニケーションでは、同じ行為や現象についても解釈が異なってしまうため、誤解が生じることを知っている。		○	○	
10	文化は固定的なものではなく、複雑に絡み合い、かつ接触やグローバリゼーションによって常に変容していることを知っている。		○○		
11	異文化状況というのは、特に外国に行かなくとも様々な形で身近に存在し、日本に居ても、そういう状況に対処するために相手の文化に根ざした考え方を学ぶ必要がある（ことを知っている）。				○○
12	さまざまな文化にはその勢力や広がりに差はあるが、共通点や相違点が常に存在し、文化に優劣はないことを知っている。			○	○

【態度面】

		1できない	2あまりできない	3おおよそできる	4できる
13	異なる言語や文化との共通点・相違点に注目し、それを自然に（当たり前のこととして）把握し受け入れることができる。		○	○	
14	言語や文化の違いに対する抵抗や偏見を捨て、自分とは全く違う考え方も、また理解に苦しむような「中間的な曖昧さ」も受容できる。		○	○	
15	学校教育の場だけでなく、常に他の言語や文化に興味を持ち、自ら進んで異文化コミュニケーションの状況に入っていくことができる。		○	○	
16	全ての言語や文化が同等であるという考え方に立ち、様々な異文化との接触に意義や価値を見出すことができる。		○○		

17	異文化・多文化のコミュニケーションで出会う障害を乗り越えるため、自分の立場を説明し、相手の文化を深く理解しようとする問題解決の努力を、根気強く強い意志を持って行うことができる。		○○		
18	自分の文化的価値観に基づく先入観や安易な一般化を排して、自他両方の文化を批判的に見たり、自らの文化と一定の距離を置いた議論をすることができる。		○	○	
19	文化や価値観というものが、もともと相対的なものであるという視点から、自文化と異文化両方について対等で客観的な判断ができる。			○○	
20	異文化状況に試行錯誤しながら積極的に対応することで培ってきた「柔軟性」によって、新しい状況にも自信と余裕を持って対処することができる。		○		○
21	異文化を持つ人のアイデンティティーを自分と同等のものとして敬意を持って受け入れ、親密な関係を築くことができる。		○	○	

【スキル面】

＊この側面は思考の対象よりも「思考形態として何ができるか」を表す述語部分が重要なのでそこに下線部を引いてある。

		1できない	2あまりできない	3おおよそできる	4できる
22	異なる言語や文化についてそれを構成する要素（＝構成要素）を客観的に観察・把握し、自分なりに分析することができる。		○	○	
23	異なる言語や文化について、その構成要素をカテゴリーやジャンルに基づいて体系的に把握することができる。		○	○	
24	異なる言語や文化について、その構成要素を一貫した手順に基づいて比較し、類似点と相違点をきちんと把握することができる。			○○	
25	自分の言語や文化について客観的で適切な説明ができ、異文化に対しても、自分の意見や見解を客観的かつ十分に表現できる。		○	○	
26	外国語でのコミュニケーションを学ぶ過程で、過去に習得された言語（母語など）の知識に基づいて、それと外国語の関係についての仮説を自分で立て、比較、検証しながら学習をしていくことができる。			○○	
27	外国語を使う際に、相手の言語や文化との違いを常に考慮しながら、相互理解に至るコミュニケーションを構築していくことができる。			○○	
28	異なる言語と文化に対して、これまでに得た知識と経験を活用しつつ、自分なりの学び方を確立していくことができる。		○		○
29	自分の学び方が効果的かどうかを実践の中で振り返りながら、生涯を通じて外国語や異文化を継続的に学んでいける。			○	○

参考ウェブサイト： 松本佳穂子「異文化間能力を伸ばす新しい異文化理解教育-科学研究費助成研究-」
https://intercultural-education.net/　2023 年 5 月 8 日閲覧

○留学中の写真等

（イギリスの家庭にお邪魔させてもらい伝統的なクリスマスディナーを楽しみました。）

（前期、後期とも Global Baddies Project に参加し、多くの多国籍の友達ができました。）

（教会ではよくフリーフードが出され、食事しながら会話を楽しみます。）

（毎週月曜日、留学生のためのイベントに参加し、日本の文化をプレゼンしたり、他国の文化を学んだり、異文化交流をしました。）